SCIENCE AGORA

あなたと創るこれからの科学と社会

サイエンスアゴラ2014
総括セッション
～サイエンスアゴラを振り返る～

デザイン ：丹下理恵、田中佐代子（筑波大学 芸術専門学群）

（当日の風景）

概要

JST 内外の参加者と 2014 年のサイエンスアゴラを振り返り、サイエンスアゴラ 2015 設計に向けた課題を整理することを目的とし、サイエンスアゴラ 2014 の最終日（11 月 9 日）に総括セッションを開催した。

小長谷次長よりサイエンスアゴラ 2014 が掲げた目標の再確認の後、あらかじめお願いした評価担当者（JST 部長および推進委員）からの講評を参加者全員で聴いた。その後、数名ずつ５つのテーブルに分かれ、来年度に向けて取り組むべき課題を話し合った。

この総括セッションで提起された課題はおおむね以下のように整理された：

- サイエンスアゴラの開催趣旨をわかりやすく整理し、検討経緯も含めて出展者に周知徹底する。サイエンスアゴラの中長期的な展望も示す。（趣旨の共有）
- その年に社会的に関心の高いテーマをとりあげる。（国民目線でのテーマ設定）
- 企画段階から多様なアクターの参画を得て、多様な客層向けに異なるテーマを意識的に設定する。（参加者の多様化・コミュニティを超えた協働）
- 学協会への働きかけを行う。分野の多様化も図る。（科学コミュニティの巻き込み強化）
- 民間の協力や資金も獲得し、税金で丸抱えにしない。（資金源の多様化）
- 企画の配置・タイムテーブル・平日と休日の使い分け・パンフの工夫等により、多様な参加者がそれぞれ有意義に過ごせる導線を作りこむ。（プログラム構成）
- 首都圏以外からの参加が得られるような設計を検討する。（開催地域・協力地域の多極化）
- Free wifi 環境の整備を含む、発信を意識した IT インフラ整備（発信）

2014 年、JST が研究コミュニティの一員として、サイエンスアゴラに強いコミットメントを示したことで、来年 10 周年を迎えるサイエンスアゴラに新たな発展の芽が生まれたが、課題は多く残されている。今回提起された課題を十分ふまえて、次年度以降のサイエンスアゴラを設計したい。

目次

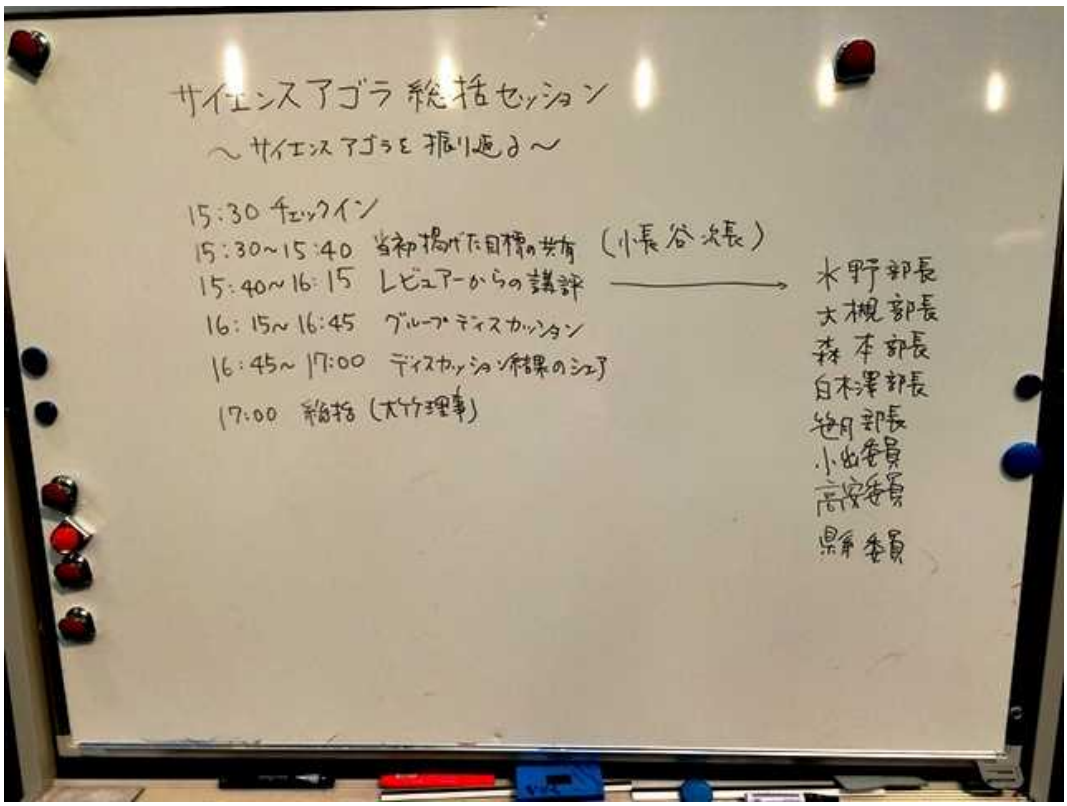
概要 2
1. 総括セッション企画の目的 4
2. サイエンスアゴラ 2014 が掲げた目標 5
3. 評価担当者からの講評 6
3.1 水野部長より 6
3.2 大槻部長より 6
3.3 森本部長より 7
3.4 白木澤部長より 7
3.5 笹月部長より 7
3.6 小出委員より 8
3.7 高安委員より 9
3.8 縣委員より 9
4. サイエンスアゴラ 2015 に向けた課題 10
4.1 テーブル１ 10
4.2 テーブル２ 12
4.3 テーブル３ 14
4.4 テーブル４ 16
4.5 テーブル５ 19
5. 理事・センター長の言葉 22
5.1 大竹理事より 22
5.2 毛利センター長より 23
6. まとめ 24
付録１ 総括セッションアジェンダ 25
付録２ 総括セッション参加者一覧（五十音順、敬称略） 26

1. 総括セッション企画の目的

JST 内外の参加者と 2014 年のサイエンスアゴラを振り返り、サイエンスアゴラ 2015 設計に向けた課題を整理することを目的とする。

JST 外部の出展者・参加者や JST 内部の多様な事業担当者の視点から評価を受けることで、科学コミュニケーションセンターに閉じない視点でサイエンスアゴラ発展の可能性を探る。また、JST 内部の各部署から評価者を出してもらうことで、JST 各部署のサイエンスアゴラへの関心を喚起し、2015 年度以降の協力を得やすくする。

予め依頼した評価者から講評をいただき、サイエンスアゴラ 2014 が目標を達成できたか議論を行うワークショップ形式のセッションとする。



2. サイエンスアゴラ 2014 が掲げた目標

小長谷幸 次長（サイエンスアゴラ 2014 タスクフォースリーダー）

サイエンスアゴラは、「広場をつくる」ことが目的である。あらゆる人が集まって、科学と社会の関係を考え議論する場をつくることは、2006 年にサイエンスアゴラが始まった当初から目標として掲げられてきた。今年はその原点に立ち返ることにした。

今年は、二つの目標を掲げた。

第一の目標は、研究者あるいは研究コミュニティの主体的参画を得て企画を充実すること。

第二の目標は、多様なステークホルダーの参画を得て、楽しむだけにとどまらない、深い議論ができるような場にすること。

第一の目標達成のために、JST も研究コミュニティの一員として、JST およびその関連機関の主体的な参画を促した。

第二の目標達成のために、海外からの多くの方々を招聘するなどして、多様な方々と議論する場を作った。

こうした取り組みを少しずつ進めてきたが、この目標が達成できたかどうか、今日は皆さんから忌憚の無いご意見をいただき、来年につなげていきたい。

（参考）

2014 年のサイエンスアゴラでは、科学コミュニケータだけでなく、科学者、政策立案者、ビジネスリーダーといった科学技術のステークホルダーが幅広く参加する場を目指して、以下二つのことに挑戦する。（5/19 理事長記者会見資料）

① 研究者（コミュニティ）の参画による企画の充実

…JST バーチャルネットワーク研究所の一般公開、研究者コミュニティに内在する課題の議論、学術領域融合、社会との相互作用、研究倫理、人材育成など。

② 科学技術に関わるステークホルダーの参画

…メディア・出版業界、産業界、政治・行政、一般市民、次世代人材など。

3. 評価担当者からの講評

3.1 水野部長より

- 感想を素直に述べたい。
- ワークショップをいくつか見たが、科学コミュニティが一般の社会の方々を交えた対話ができていたかという観点ではもう一歩かなと思った。
- 研究倫理のセッションに参加したが、コミュニティ内部での議論はきちんとできていたようだ。たとえば、以下のような発言が印象に残った。これから発信していけるとよいだろう。
  - 「research ethic と research integrity がごちゃごちゃになって議論されている」
  - 「STAP 細胞事件では、『研究不正があったかどうかより STAP 細胞があるかどうかというほうに力を注ぐべき』という意見があるが、それは違うと主張していかなければならない」
- 博士号をとって社会に出て行く人たちの話は、学部や修士の人たちにとって大変役立つ話だった。
- 一般の来場者が 1 日楽しめるような、一貫したテーマがあったらよいと思った。

3.2 大槻部長より

- 理数学習推進部の企画の範囲に限られる講評になることをあらかじめご容赦いただきたい。
- 科学の甲子園の実技試験の模擬や、先端学習をやっている高校生のポスターセッションをやった。参加者を見てみると、外部の方々が来ているというより、事業に参加している中高生がお互いの優れた研究を見て相互に触発される企画になっているという印象。それはそれで意義はあるが、外部の方々に中高生の実態を知っていただけるところまでできていない。
- 科学技術の深い難しいところで議論するという点では、女子中高生の進路選択の本音について議論する試みをした。現役の女子中高生にも参加していただき、本音の議論をしてもらったが、なかなか外部の人たちが参加してもらえなかったのが心残りだ。

3.3 森本部長より

- 何箇所かまわった感想を述べたい。
- 多様なステークホルダーを呼ぶために、それぞれの会場で役割分担はされていたと思うが、（企画の配置に）もっとメリハリをつけることができないか。
- 「楽しむだけではない」という今年の趣旨について事前にどのくらい周知徹底できたか（できていなかったのではないか）。来場者は、今年を見て来年来るか判断すると思う。来年は周知の際に十分工夫すべきだろう。
- JST からの出展についても、今年の趣旨を踏まえたものになっていたか疑問。JST 内部で、今年のアゴラの方向性が共有されていなかった。今回の状況を見て、来年はもう少し出展に協力していけるのではないかと思う。

3.4 白木澤部長より

- ナノテクプラットフォームと SIP についてブースで出展をした。COI についてはアゴラステージで出展した。出展者の立場からの感想を述べたい。
- 企画について、研究者からの前向きな協力が得られた。ステークホルダーとして研究者を取り込めたのは成功だ。
- 来てくれた研究者が自分のセッションが終わったら帰ってしまった。他の面白いセッションに参加してもらいたかった。アゴラのパンフレットを渡しても、その人たちが興味を持つものがどこにあるか、中々分かりにくかった。コミュニティに合わせた宣伝が大切に思う。
- 女子中高生のセッションは非常に面白い話が聞けた。よい方をゲストに呼んでいたので、（聴衆に関係者が多いのが）「もったいないな」と感じた。一般的な広報での集客には限界があると思う。コミュニティを通じた効率的な周知方法をもっと活用すべきだろう。
- 子供達はとっても楽しんでいた。ザリガニ釣りはとても人気があったのが印象的だった。

3.5 笹月部長より

- 今年アゴラ事務局が目指した対話の趣旨は、出展者側に十分伝わっていなかった部分があると思う。
- 例えば、倫理的にかなり議論の余地がある研究をやっている人が、倫理的観点からの質問を受けて「考えていません」と答えてしまう場面に出会い、残念に思った。こうした問題にしっかり向き合う対話の場を目指すのであれば、今後サイエンスアゴ

ラの趣旨を徹底していくべきと思う。

- プログラムが十分整理されていないように思う。客層を意識した構成にする工夫が必要だ。プログラムを整理して作ることと、多様な人の取り込みは両立するはず。
- ICT の光と影のセッションは事前登録が少なく集客に苦心したが、結果的にはたくさんの参加者が得られてよかった。
- 各セッションでは、同じコミュニティの人が集まっているように見えた。多様なステークホルダーでの議論を目指すのであれば、コミュニティを超えて人が集まるような工夫が必要だ。

3.6 小出委員より

- 新聞記者を 30 年以上やってきた経験で、昨年からアゴラに関わっている。昨年アゴラを見た時、記者の取材対象にはならないと感じた。ある世界の人たちが自分たちの楽しみのために集まっており、社会との関わりは希薄だった。もっと社会との関わりを深めるコンセプトを打ち出してほしいと申し上げた。特に、福島原発の事故以来、科学技術と社会の関係は、プロパガンダではすまない。
- 今回は、十分というわけではないが、社会との関わりを模索するいくつかのインターフェースが感じられた。展示も興味深いものが多く、人もたくさん集まった。
- アゴラが掲げるコンセプトが「どう決まったのか」「なぜそうなのか」が見えてこない点は課題。これから３年後、５年後、アゴラがどうなっていこうとしているのか、何を目指しているのかを関係者は知りたいはず。
- 考えの方向性を示すことが大切に思う。例えば、NUMO（原子力発電環境整備機構）の展示を見に行ったが、技術の展示に終始して経緯が述べられていなかった。
- 今年一番話題になった STAP 事件について企画がなかったのは残念。
- 若い人たちが入ってこなければならない。デザインや表現という枠を作ると若い人の参画がもっと得られるように思う。
- はこだて未来大の美馬先生よりメッセージを２つ預かっている。１つ目、彼女は、2006 年にアゴラを始めるにあたって、ESOF（Euroscience Open Forum）と対比をされている。ESOF は、最先端の科学の紹介する、市民に科学技術への興味を刺激する、学際的なコミュニケーションの場を提供する、といったコンセプトを掲げているが、アゴラもこのように、活動の趣旨を明確に表現してみてはどうか。２つ目、国立科学博物館は地方との連携がある。アゴラも、年に１回か２回、これほど大きなものでなくてもいいが、地方で実現してはどうか。

3.7 高安委員より

- ここ数年アゴラを見て思っているのは、出展の配置計画がきわめて重要だということ。今年は少しすっきりしたが、それでもまだまだ改善の余地がある。どのようなコンセプトで配置されているのかがわかりにくい。
- 説得型の展示が減って体験型の展示が増えているのはよいが、いざ説明を聞いてみると、ほとんどの企画が説得型のマインドセットで作られている点は残念。来場者の意見を聞く態度に欠け、来場者がどんな背景でここにきているのかを知ろうともしないで、一方的に説明をしてしまう例があった。高校の文化祭のように「仲間内に対する説明」に終わることなく、もう少し丁寧な交流型を期待したい。
- ステークホルダーの交流という観点からは、参加者に偏りがある。ジャーナリストや学校教育・科学博物館からの参加者が今年は少なかった。幸いには家族連れは多かったが、それらの方々を目当てに出展してきている人たちをどう位置付けていくか、課題だろう。

3.8 縣委員より

- 国民が何を知りたいと思っているかを考えたほうがよい。“科学のため”の押しつけではなく、社会や個人の文脈でこのイベントをどう企画できるかが重要だ。科学技術のためにサイエンスアゴラをやってきたと思うが、今後は社会のために何をやっていけるか、地域や世代のことも考えながら、取り組んでいくとよいと思う。
- これまで土曜・日曜だったイベントを金曜も開催することにしたことで、平日でなければ参加しにくいという方々が参加された。金曜は、研究者が集い、最先端の研究について記者発表や記者レク行い、他分野の研究者と議論をするようになると良いと思った。そこに一般の人たちもやってきて、スリリングな科学の臨場感を味分けるようになると、国民的な関心を集めるようになるだろう。新聞やメディアに露出していき、国民的な行事となることを目指して今後５年～１０年は努力して欲しい。
- お台場に人が集まって楽しむのは良いが、首都圏の人たち以外はまだ科学コミュニケーションへの主体的な参加がなされていないというのが実態ではないか。これまで培ってきたものを、全国のあちらこちらに展開し、今後５年～１０年種をまいていってもらいたい。

4. サイエンスアゴラ 2015 に向けた課題

4.1 テーブル 1

メンバー：梅原、金山、佐藤、白井、白根、水野、渡辺

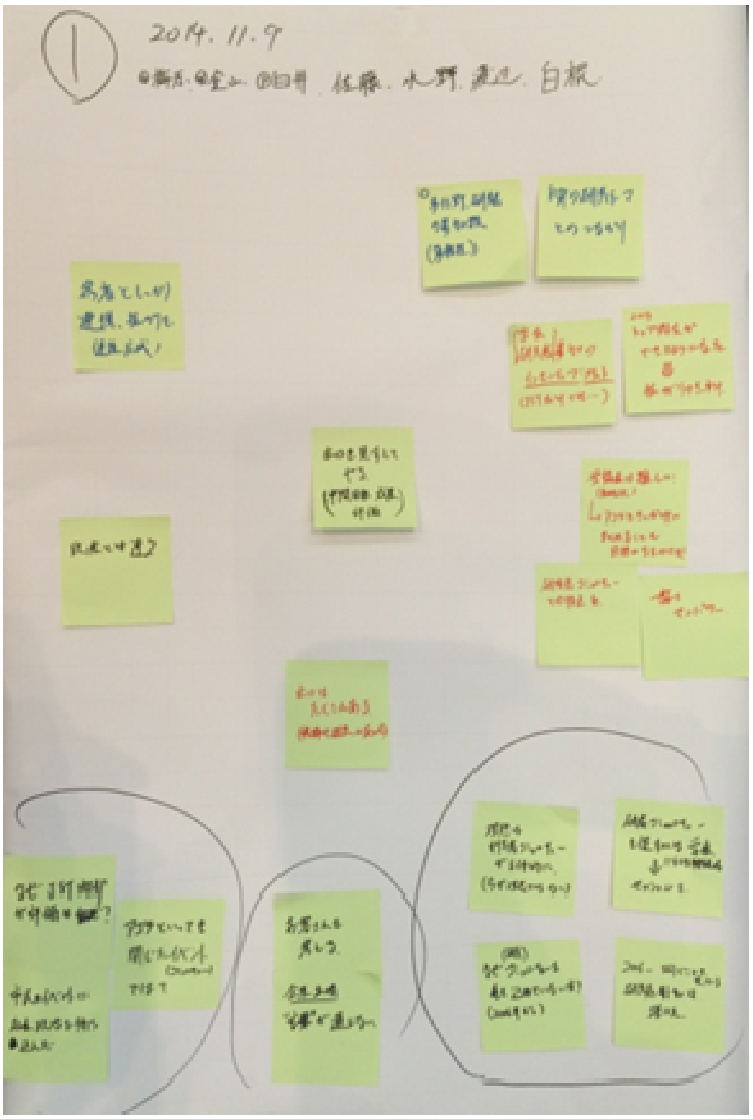
（概要）

- **2006** 年から同じ課題が言われている。**2006** 年に比べて参加する研究者の数ははるかに増えたが、コミュニティとしてのコミットは無いと思う。学会の取り込みが難しい。学会側にアゴラの場に「参加したい」と思わせるようなものがほしい。
- アゴラは目的・出口が多様なので評価が難しい。参加者をお客さんと見ることが重要かもしれない。お客さんにどういったものを提供できたかインセンティブを考え、評価していく必要がある。
- 研究者の参加者数ではなく、分野の多様性なども評価していくとよいだろう。

＊付箋の書き起こし

- ✧ 各省としっかり連携、拡がりを（連続・広域）
- ✧ 多分野、研究者の参加数（多様性）
- ✧ 自身の研究テーマとのつながり
- ✧ 研究所（学会）参加のインセンティブメリット（ＪＳＴだけでは・・・）
- ✧ ２０１４トップ外交ができるようになった⇒拡がりのきっかけ
- ✧ 学協会は難しい（細分化）→アゴラをきっかけにまとめることも目標になるのでは！
- ✧ 欧米とは違う
- ✧ 出口を見すえてやる（中間目標・成果・評価）
- ✧ 出口はたくさんある（議論も過去に会った）
- ✧ なぜＪＳＴ内部が評価？
- ✧ 市民のイベントに社会政治を持ち込んだ
- ✧ アゴラと言っても閉じたイベント（コミュニティー）では？
- ✧ お客さんを考える
- ✧ 企業立場　“言葉”が通じない
- ✧ 理想は科学者コミュニティーが主体的に（今が理想ではない）
- ✧ なぜコミュニティー（研究）を巻き込めていないのか？（２００６年から）
- ✧ 研究コミュニティーを促すには学会（分子生物学会 etc）⇒セッションを
- ✧ ２００６から同じことを言っている　　研究者参加は増えた

付箋の写真（テーブル１）



4.2 テーブル２

メンバー：片山、津村、野里、濱田、笹月、有本、安重

（概要）

- テーマ設定にストーリー性を持たせる。参加者目線を意識した設計が必要。目玉のテーマを掲げる。客層が異なるテーマを意識的に設定していく。社会的に関心の高いテーマ、難しいテーマの設定にチャレンジしていく。
- テクニカルには、プログラムや配置、運営上の工夫（テーマの近いプログラムを近づけたり、他の企画への関心を喚起するような工夫がほしい）、パンフレットの見易さを改善する。
- 成果の蓄積と次への活用。記録を残して次の企画に生かしたい。例えば、参加者アンケートが全体の設計につながるような工夫がほしい。
- 来年に向けて「コミュニティを超える」が大きなコンセプトになるのではないか。地方の力を引き出すためにも、地域版のアゴラ開催が求められる。地域の特色を生かすような取り組みがよい。コミュニティを超えるには、企画段階から、多様なアクターの参画が必要。

＊付箋の書き起こし

来年１０周年　　アゴラに向けた克服課題

○テーマとストーリー　参加者目線（社会の関心）

- ✧ 今回のアゴラはこれ！という目玉のテーマを掲げている　←マスコミも取り上げる
- ✧ 社会的関心の高い（ただし難しい）テーマへの挑戦を。
- ✧ (ＡＡＡＳ)　Ｔｏｐ　Ｓｃｉｅｎｔｉｓｔが集まる、魅力を高める
- ✧ Ｓｃｉｅｎｃｅ＆Ｓｏｕｅｔｙ　客層が異なるテーマ、配置も含めて工夫が必要
- ✧ “楽しい”という集客も大事(家族連れ)

○プログラムや配置の工夫

- ✧ テーマの近い企画のプログラム、配置の工夫を
- ✧ 企画内容について前広にアナウンスを
- ✧ 参加者にわかりやすいテーマ、配置、パンフレットの工夫

○コミュニティーを超える

- ✧ コミュニティーを超えた集客の工夫
- ✧ “科学をともに創る”

○地方の力を活かす

- ✧ 地方の力を活かす。地方を巻き込む工夫（技術、デザイン、若者）
- ✧ 地域版アゴラの開催（持ち込み×地域カラー）

○成果と蓄積と次への活用

✧ 記録とアウトプット（次へのステップアップのため）

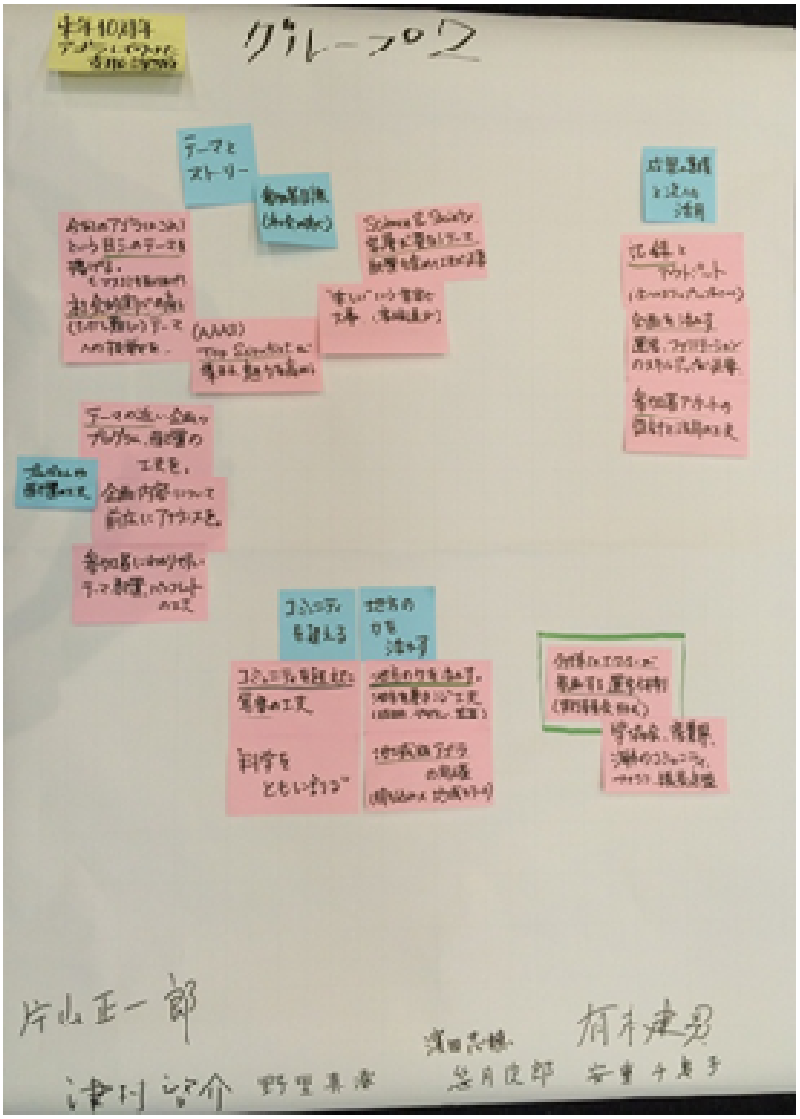
✧ 企画を活かす　運営、ファシリテーションのスキルアップが必要

✧ 参加者アンケートの設計と活用の工夫

○多様なアクターが参画する運営体制（実行委員会形式）

✧ 学協会、産業界、海外のコミュニティ、マスコミ、議員連盟

付箋の写真（テーブル２）



4.3 テーブル３

メンバー：田中、鴨野、浅羽、小出、黒木、長谷川、白木澤

（概要）

- wifi が無いのは大きな問題。（片山副館長より「来年はつながるようになる」）
- 様々な出展をリアルタイムで報道。今やっていることをもっとわかりやすくしたい。
- 地方で開催した時、東京でやっていることがわかるような中継ができるとよい
- 社会が興味を持つテーマをとりあげる
- 財源の問題。地方自治体も巻き込んでやっていく必要がある。
- 財源の話は内部から出にくいだろうが、国におんぶにだっこよりも、民間の力を入れるほうが長い目で見るとよい。イギリスのサイエンスメディアセンターなどは好例。

＊付箋の書き起こし

来年に向けての課題

① ＩＣＴ！

✧ ｗｉ－ｆｉがない！インターネットが使えない！１０周年、海外の方

✧ ↑昨年提案したのに改善されていない

✧ アゴラの良さを把握できていない　きちんと認識して

✧ 総括セッション手抜きでは？一般の人の議論をふまえて

② ファシリテーション

✧ あとから入った人もついていけるように

✧ タイトルだけでは内容がわからない、呼び込みをして！

✧ ＡＡＡＳを意識していた　→水平展開、地方での開催（JST20 周年イベントと一緒に）

✧ 地域の科学館との連携

③ 社会が興味あるテーマを必ず取り上げる

✧ サイエンスコミュニケーションの人達にはよかったがアゴラの狙いは？対象は？

✧ 今日の議論のポイントをまとめておく

④ 財源の問題　⇒　アゴラの重要なテーマ

✧ 透明性と公開、先行事例の学び

✧ 企業を呼ぶ

✧ 地方自治体

その他

✧ ＪＳＴの広報マンが来ていない

✧ 運営側の狙いが伝わりきれていない

✧ 様々なステークホルダーが一緒にやること

付箋の写真（テーブル３）

ICT!
①
Wifiがない！
インターネットが使えない！
10周年 海外の方
10年間家族に
改善出ていけ、
来年に向けての
課題
③
社会が興味のある
テーマを必ず
とりあげる
3
田中
アジラの自立を
把握できていない
ちゃんと認識して
終活セッション
手抜きでは？
一般の人の議論もほしい
サイエンスコミュニケーション
の人達にはよかったが
アジラの狙いは？機能
今日の議論の
ポイントを
まとめておく
②
ファシリテーション
JSTの広報マン
が来ていない
④
財源の問題
⇒アジラの重要テーマ
運営側の
ねらいが
伝わり
きれていない
様々な
ステークホルダー
が一緒に
やること
企業と
手をつぶ
地方自治体
遠隔性と公開
行政側の学び
AAASと意識していた
→来年度開
地方での開催
(20周年イベントと一緒に)
地域のサイエンス
との連携
あとから入った人も
ついていけるように
タイトルだけでは
内容がわからない
呼びかたを工夫して！

4.4 テーブル４

メンバー：高安、小長谷、小賀坂、森本、深沢秀一、河崎泰介、小泉

（概要）

- 目玉、運営、企画、組織、そもそも、の５つでまとめた。
- 目玉：アゴラのテーマ、コンセプトは出たほうがよい。科学と倫理、グローバル・テクノロジーのような毎年のテーマがあるとよい。毎年のホットイシューを決めていく。
- 運営：企業を巻き込んで中長期計画が必要。金曜と土日のセッションを活用する。
- 企画：半分以上は外部の人たち、メディアの参画、ミッシングリンクを探す、政策との関係を探すといった課題がある。
- 組織：未来館との連携が重要。多様な連携が重要。地方との役割分担、JST の立ち位置、予算は重要なら１０倍くらいにはなるはず。
- そもそも、科学を言葉で伝えるのではなく、イベントそのもので体現する。場所はお台場でなくてよい。コミュニケーションという言葉は使わないほうがよい。

＊付箋の書き起こし

○運営

- ✧ 企業の巻き込み
- ✧ 中長期計画
- ✧ トップダウン
- ✧ ３日開催は良い。日毎のメイン客（ターゲット）を決めて実施するのが良い。
  - ➢ 金曜日・・・ビジネス・学術分野
  - ➢ 土曜日・・・学生セッション
  - ➢ 日曜日・・・家族・子供向け　　ではどうか？

○企画

- ✧ 広く意見を聞くこと
- ✧ 来場者の多様性
- ✧ メディアの参画
- ✧ 企画して外部（科学者以外）を半分以上
- ✧ 万人にわかりやすく
- ✧ 政策との関係
- ✧ Missing　Interaction は何か？
  - ➢ ＊＊＊×メディア
  - ➢ Scientist　×　General public
  - ➢ Scientist　×　Scientist
- ✧ Missing　Stakeholder は誰か？

- メディア
- Society
- Industry
- Administrator／Government

✧ Interaction の出来・不出来

- 子供向け　　○　うまくいってる
- 中・高生向け　　○　うまくいってる
- 科学者から Public へ　　○　うまくいってる
- Social　Topic　　×　ダメ
- Policy　Maker－Public　×　ダメ

○目玉

✧ 目玉をもとう
✧ ホットイシュー、テーマの設定
✧ 毎年のテーマ・・・目玉は？？
✧ テーマ、コンセプト、理念
✧ 毎年のテーマ「科学と倫理」「グローバル・テクノロジー」など
✧ Flagship　event をもってはどうか

- Academic　Conference
- 展示会　－　イノベジャパン的な

○そもそも

✧ コンセプトに「科学」は出てこないほうが良い
✧ Location　お台場でなくてもよいのでは？（幕張メッセ・東京ビックサイトとか）
✧ 「科学」という言葉「コミュニケーション」という言葉を使わない
✧ 本当に社会全体を巻き込みたい？

○組織

✧ 未来館との連携
✧ 地方との役割分担
✧ ＪＳＴの役割・・・アゴラとの距離、国際化、学会、民間
✧ 予算１０倍
✧ そもそも多様な連携

付箋の写真（テーブル４）

4.5 テーブル５

メンバー：安孫子、酒井、大槻、縣、毛利、鈴木、今羽右左ディヴィッド甫

（概要）

- **2006** 年から同じ論点が出ているが、今年は **JST** の各部署が関わるようになってきた点が新しい。ただし、良い面と悪い面がある。
- 社会との対話は、本来 **JST** の各部署でおこなうべきものであり、アゴラのためにやらされてやるものではない。**JST** 側の認識を確認していく必要がある。

＊付箋の書き起こし

○ＪＳＴ（主催者）の問題点

- ✧ ＡＡＡＳは研究者が主催（アゴラとの違い）
- ✧ 日本版ＡＡＡＳ？
- ✧ ＪＳＴの事業　予算の仕組み　限界
- ✧ 自らやりたくて出展しているの？
- ✧ 継続することが大事（特にＪＳＴの人々）
- ✧ ＪＳＴの予算のつけ方が４月以降からスタートのため時間切れ
- ✧ ＪＳＴプログラムの“社会還元”はアゴラ以外でも必要なマインド！！
- ✧ ＪＳＴ出展は“アゴラのためだけ”に行うものではない
- ✧ ＪＳＴ主催から研究者主催へ（今は受け皿がない）
- ✧ 日本学術会議では無理だろう、ＪＡＳＣは時機早尚？
- ✧ 出席者が登録料を払っても参加できるようにしたい
- ✧ 毎回が初回に９年間なっていた。今がスタートできるか
- ✧ 来年、再来年を今責任をもってＪＳＴが計画する
- ✧ 価値のある失敗を含む挑戦を長期的に応援
- ✧ 可能な文化作りのための仕組みづくり→当事者意識と責任

○テーマに合った客層へのＰＲ

- ✧ 「テーマ」などを数年前から準備しよう！
- ✧ 誰もが来やすい雰囲気作り　→　子供だけでなく大人も遊びに来れる仕組み（特に高齢者をもっと）
- ✧ 毎年同じ反省の繰り返し
- ✧ 子供たちが目を輝かせていた＝大人もワクワクを共有
- ✧ 国民の目線
- ✧ ステークホルダーとの関り方、伝え方
- ✧ セッションナビ　－　コンシェルジュ　－　フローチャート
- ✧ 「子供の輝ける未来」をテーマに

✧ 子供達の輝く未来！　－　体験　－　言葉
✧ メリハリ
✧ 平日・土日対象や内容を工夫しよう！
✧ 親が学べるテーマも大事
✧ “親も研究者”家族連れも大事なステークホルダーを含んでいる
✧ 国民が興味のあるテーマ
✧ 託児など子供と別に親が見てまわれる環境を
✧ 日常から可能な参画＝政策提言への明確な道筋
✧ 自分のセッションのみで帰ってしまう、交流になっていない
✧ 研究者が交わる場を
✧ 平日は研究者 VS 記者
✧ 研究者向けの広報や情報提供
✧ 研究者の参加目的は？
✧ 生活知を活かしたアイディアの取り込み
✧ メディアが取り上げたくなる研究者からの発信を

○その他

✧ 科学技術は日本だけで考えても良いでしょうか？世界のニーズは？
✧ 他国との関係　アゴラで何か出来ないの？
✧ 地方展開

付箋の写真（テーブル５）

JSTの
AAASは
研究者が主体
(アゴラとの違い)
日本版AAAS?
JSTの本業
予算のしくみ
自らやりたくて
出展しているの?
継続することが
大事(特にJSTの人々)
毎年 同じ反省の
繰り返し
子どもたちが
目を輝かせていた
大人もワクワクを共有
国民の目線
ステークホルダー
との関り方
伝え方
メリハリ
セッション ナビ
- コンシュルジュ
- フローチャート
平日
土日
対象や
内容を
工夫しよう!
毎回が初の回に9月
間なっていた
今がスタートできるか
親が学べる
テーマも大事
親も研究者
家族連れも大事な
ステークホルダーを含んでいる
国民が興味の
あるテーマを
研究者が
交われる場を
平日は
研究者vs記者
JSTプログラムの
"社会還元"は
アゴラ以外でも
必要なポイント!!
JST出展は
"アゴラのためだけ"
に行うものではない。
高専など
子どもと別に
親が見てもわかる環境を
日常から可能な範囲
政策提言への明確な
道筋
自分のセッションのみ
で終ってしまう
交流になっていない
研究者の
参加目的は?
研究者向けの
広報や情報提供
JST主体の
研究者主体へ
(今はまだまだない)
科、再事業を
責任を持って
JSTが計画する
生活知を踏まえた
アイディアの取込み
メディアが取り上げ
たくなる
研究者からの発信
日本学術会議
とは連携しよう
JASCは何を目的?
出張者が有料料
を払っても参加
できるようにしたい
地方展開
他国との関係
アゴラで何が出来ない
の?

5. 理事・センター長の言葉

5.1 大竹理事より

まずはみなさんご苦労さまでした。参加者は１万人程度いったのではないかと思う。

報告書をきっちり作りたい。キーノートセッションなどは、テープおこしもつけてしっかり記録を作りたいと思っている。

私もサイエンスアゴラに 2006 年の第 1 回から参加しており、その頃から特に科学者が参画しなければいけないという話がされていた。昨年参加してみて、「ちょっとずれてきたな」という感じがあったので、区切りの第 10 回を待たず、無理はあっても今年（第 9 回）から初心に戻ってできる努力をすることにした。AAAS も ESOF の調査をしっかり行い、それが今回の企画に活かせたと思っている。

JST の主体的な参加を促したのは、JST の研究発表会にしたかったわけではなく、様々な科学者コミュニティを引き出す仕掛けとして JST を使いたかった。インセンティブをつけてやるようなものではないと思うが、JST だからこそ関係者の協力が得やすい面はあると思う。

サイエンスアゴラが、科学者でない人までが科学に引き込まれる象徴的なステージになってほしい。半歩くらいではあるが、進みたいと思った方向に進めたかなと思っている。単なる一過性のイベントではなく、日本の社会と科学のためになる継続的な活動につなげていきたい。今後も厳しい意見を寄せてもらいたい。今年の経験は、科学コミュニケーションセンターだけでなく、JST の各部署の活動に活かしたい。

（来年に向けて）

- 今年は企画委員会で十分な議論ができなかったが、１０回に向けて議論をしていきたい。サイエンスアゴラは、単年度のイベントとして運用されている傾向があり、イベントが終わると報告書をまとめて一休みして、次の年の連休明けくらいからまた活動を開始するのが通例になっているようだが、Euroscience や AAAS も２年前から準備を始めている。来年のことをすぐに考え始めたいので、スタッフは覚悟してほしい。
- 学会への働きかけはしっかりしていきたい。JST の各部署にいる、学会とのつながりを強く持った人と協力したい。
- パンフレットの作り方はまだ努力の余地があると考えている。今年も努力はしたが、Euroscience や AAAS に一日の長がある。日本人は軽くしようとするが、内容のつまったずっしりしたものでもいいと思っている。

・ 専門家のキャリアセッションだけでなく、ノンアカデミックポストを探すキャリアセッションのようなこともやっていきたい。
・ ESOF や AAAS 年次総会のように、毎年のテーマも考えていくべきだろう。サイエンスアゴラは「あなたと創るこれからの科学と社会」というテーマを掲げているが、これは本来アゴラが取り組むべき永久普遍なもの。
・ 地方展開はやっていきたい。毎年は無理かもしれないが、２年に一度くらいできたらいいなというのが個人的な感想。

5.2 毛利センター長より

３日間、今年もアゴラをひらいてくれてありがとうございます。これまで９年間、毎回毎回議論をしている。今年行われた議論も目新しいものはない。

しかし、新しいことができる芽が大竹理事の努力によって生まれたように思う。それは、JST が組織をあげてアゴラに参加してきたこと。これは新しい現象。「来年も、大丈夫ですね？」と問いたい。今回は非常に良い機会だ。この芽が本物になるかは、ここにいる JST の部長さんたちにかかっている。理事長や理事から言われて付き合いでやったのであれば、来年は無理だろう。

アゴラは JST にとってものすごく利用価値のあるものだ。JST 自身が必要なものと考えられるか？来年、期待しています。今日はお疲れさまでした。

6. まとめ

この総括セッションで提起された課題はおおむね以下のように整理される。

- サイエンスアゴラの開催趣旨をわかりやすく整理し、検討経緯も含めて出展者に周知徹底する。サイエンスアゴラの中長期的な展望も示す。（趣旨の共有）
- その年に社会的に関心の高いテーマをとりあげる。（国民目線でのテーマ設定）
- 企画段階から多様なアクターの参画を得て、多様な客層向けに異なるテーマを意識的に設定する。（参加者の多様化・コミュニティを超えた協働）
- 学協会への働きかけを行う。分野の多様化も図る。（科学コミュニティの巻き込み強化）
- 民間の協力や資金も獲得し、税金で丸抱えにしない。（資金源の多様化）
- 企画の配置・タイムテーブル・平日と休日の使い分け・パンフの工夫等により、多様な参加者がそれぞれ有意義に過ごせる導線を作りこむ。（プログラム構成）
- 首都圏以外からの参加が得られるような設計を検討する。（開催地域・協力地域の多極化）
- Free wifi 環境の整備を含む、発信を意識した IT インフラ整備（発信）

このセッションは、JST の各部署の部長クラスや、出展者、および外部の委員から、客観的な意見を伺うことを主眼に設計されている。実施に、ここで述べられた課題は、次年度克服すべき問題を多く提起している。

一方で、現場でのオペレーションに工夫が無ければ、限られたリソースですべての問題を克服することは現実的に無理であろう。このため、オペレーションの現場感覚を持った反省も不可欠である。この反省もふまえて現実的な次年度計画を作りたい。

2014 年、JST が研究コミュニティの一員として、サイエンスアゴラに強いコミットメントを示したことで、来年 10 周年を迎えるサイエンスアゴラに新たな発展の芽が生まれたが、課題は多く残されている。今回提起された課題を十分ふまえて、次年度以降のサイエンスアゴラを設計したい。

付録 1　総括セッションアジェンダ

このセッションでは、JST 内外の参加者と今回のサイエンスアゴラの取り組みを振り返り、サイエンスアゴラ 2015 設計に向けた課題を整理します。
サイエンスアゴラ 2014 が目標を達成できたか、ワークショップ形式ですすめます。

■日時：2014 年 11 月 9 日（日）15:30～17:00（多少遅延あり）
■場所：日本科学未来館　会議室３
■目的：サイエンスアゴラ 2014 が、当初掲げた目標を達成できたか討論し、サイエンスアゴラ 2015 の設計に向けた課題を整理する。
セッションオーナー：大竹理事
ファシリテータ：嶋田

■アジェンダ（予定）
15:30 チェックイン
15:30-15:40　当初掲げた目標の共有　（アゴラ事務局）

15:40-16:15　レビューアーからの講評　（評価者）
* レビューアーからの講評（2 分×8 人＝16 分）

16:15-16:45　グループディスカッション
*丸テーブル（各テーブル 6～7 人程度）に分かれて、レビューアーの発表からインスパイアされる課題を書き出す
（グループ１）梅原、金山、佐藤、白井、白根、水野、渡辺
（グループ２）片山、津村、野里、濱田、笹月、有本、安重
（グループ３）田中、鴨野、浅羽、小出、黒木、長谷川、白木澤
（グループ４）高安、小長谷、小賀坂、森本、深沢、河崎、小泉
（グループ５）安孫子、酒井、大槻、縣、毛利、鈴木、今羽右左ディヴィッド甫

16:45-17:00　ディスカッション結果のシェア
* 各グループのレポーターが、課題を３つに絞って発表（3 分×5＝13 分）

17:00　総括（大竹理事）
サイエンスアゴラ 2014 で実現したことと、サイエンスアゴラ 2015 に向けた課題を整理し、全体を総括

17:00 チェックアウト

付録 2　総括セッション参加者一覧（五十音順、敬称略）

縣秀彦（国立天文台 准教授・サイエンスアゴラ推進委員）
浅羽雅晴（JST 総務部 広報参与）
安孫子満広（JST ダイバーシティ推進室 調査役）
有本建男（JST 研究開発戦略センター 副センター長）
安重千夏子（JST 科学コミュニケーションセンター 調査員）
今羽右左デイヴィッド甫（京都大学学術研究支援室
シニアリサーチ・アドミニストレーター）
梅原千慶（JST 戦略研究推進部 主査）
大竹暁（JST 理事）
大槻肇（JST 理数学習推進部 部長）
小賀坂康志（JST 戦略研究推進部 次長）
片山正一郎（日本科学未来館 副館長）
金山晋司（JST 社会技術研究開発センター 副調査役）
鴨野則昭（JST 理事）
河崎泰介（JST 理数学習推進部 企画・調査課 課長）
黒木彩香（日本サイエンスコミュニケーション協会(JASC)）
小泉輝武（JST 環境エネルギー研究開発推進部 調査役）
小出重幸（JASTJ 会長・サイエンスアゴラ推進委員）
小長谷幸（JST 科学コミュニケーションセンター 事務局次長）
酒井尚子（JST 産学連携基礎基盤推進部 係長）
笹月俊郎（JST 戦略研究推進部 部長）
佐藤秀治（経営支援 NPO クラブ）
嶋田一義（JST 科学コミュニケーションセンター 副調査役）
白井哲哉（京都大学学術研究支援室 シニア リサーチ・アドミニストレーター）
白根純人（JST 科学コミュニケーションセンター 主査）
白木澤佳子（JST 産学基礎基盤推進部 部長）
鈴木羽留香（立命館大学衣笠総合研究機構 客員研究員）
高安礼士（千葉市科学館 プロジェクトアドバイザー・サイエンスアゴラ推進委員）
津村啓介（民主党 衆議院議員）
長倉克枝（JST 科学コミュニケーションセンター 調査員）
野里真澄（放射線医学総合研究所）
長谷川奈治（JST 科学コミュニケーションセンター 事務局長）
濱田志穂（JST 社会技術研究開発センター 主査）
深沢秀一（キュレーター）
藤田尚史（JST 科学コミュニケーションセンター 調査役）
水野充（JST 知識基盤情報部 部長）
毛利衛（JST 科学コミュニケーションセンター センター長）
森本茂雄（JST 産学連携展開部 部長）
渡辺美代子（JST 執行役）

ワークショップ報告書

サイエンスアゴラ 2014　総括セッション
～サイエンスアゴラを振り返る～

平成 26 年 12 月 December, 2014

独立行政法人科学技術振興機構科学コミュニケーションセンター
Center for Science Communication, Japan Science and Technology Agency

〒102-8666 東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ 8F
電　　話　03-5214-7625
http://www.jst.go.jp/csc/

©2014 JST/CSC
許可無く複写／複製することを禁じます。
引用を行う際は、必ず出典を記述願います。
No part of this publication may be reproduced, copied, transmitted or translated without written permission. Application should be sent to csc@jst.go.jp. Any quotations must be appropriately acknowledged.